

知内町での地域理解を促す教育環境 ～「地域創生学習」の授業支援と関係機関での懇談から学ぶ～

北海道教育大学函館校
准教授 山口 好 和

2020年度の「知内SC」では、大きく次の2つに取り組んだ。一つは、知内高校での「地域創生学習」における教材づくりと学習環境の支援活動である。もう一つは、同町内で教育課題に関わる複数の機関、担当者との懇談会実施である。

同高校での「地域創生学習」は、地域への深い理解を備えて活躍する人材育成のための探究型学習である。地元出身生徒にとっては、まちの魅力と課題を見つける良い機会であり、また他地域の出身生徒にとっては、環境を活かした地場産業の実際を学ぶ好機である。同時にこの学習活動は、2022年度から高校学習指導要領改訂で導入予定の「総合的な探究の時間」に対応した、調査・実習・情報活用の練習機会としても、同高校が重要視している。

今年度は春先に休校を余儀なくされた影響で、実施時期を秋口へと移して実施した。学習活動は、大きく地域を理解する前半部(町内ツアー)と、町内各地の事業所における実習活動(担当者による講話、実習先の選択、事業所訪問と体験)を行う後半部とに分かれている。春先から夏にかけて行った、本センターと知内高校との協議を通じて、主に前半部における教材作成、見学活動での支援および後半部の成果分析に関する相談を実施することとした。

前半部の見学活動時に使用する地域理解を促すスライド教材を作成するために、郷土資料館学芸員の協力を仰いだ。町内に見られる地名の由来それぞれや開墾、農業製品の生産性向上

に関する先人の工夫、入植者の出身地域にまつわる各種の生活習慣など、地域理解の重要な素材を多数得ることができた。さらに小・中学校における過去数年間の支援活動(「出前授業」「生涯学習講座」など)での成果をふまえて、若年層と地域素材の接点や学び方について貴重な示唆を得ることができた。

「地域創生学習」当日は、まず地域の歴史やあゆみを知るためのガイド教材を作成して、講義・ワークショップ形式で町全体の様子を知ることとした。その後、町内の地形・施設を俯瞰するための見学活動を行った。町内を流れる知内川上流のダム施設見学、さらに海岸沿いの風景を俯瞰できる重内神社周辺を見学した。訪問の途中で、町内特有の植生を示す草花をめぐって一般来訪者との交流が生まれるなど、充実した活動が行えた。天候にも恵まれ、生徒たちの表情にも満足感が見られた。また見学終了後、活動時の様子をスマートフォンなどの端末で簡単に確認できる環境を準備して、生徒たちのふりかえりを支援した。このツアーの約1か月後に、町内事業所担当者によるミニ講話、現地での実習・調査が実施された。その成果分析については現在協議中である。

もう一つ、各種教育機関での懇談については、次のような結果が得られた。

まず郷土資料館で、担当学芸員と教材や学習活動をめぐって語り合ったところ、各種行事への参加や学校訪問時の様子を見ると、児童生徒の関心は高いがそれを支える行事、材料や人手

の不足が課題であるとわかった。また町内中学校での聞き取りでは、ICT設備などの教育環境はかねてから充実しており、教員相互の共同意識も高いことがわかった。地域理解を促す教育活動(通常「総合的な学習の時間」が中心を担う)の質向上を目指したいとのことであった。さらに町内にある小学校2校との共同研究を進める本学附属学校教員にも、「算数」「特別の教科道徳」での研究交流活動の様子を尋ねて、町内で得た情報を補った。

複数機関での成果聞き取りを、小さい規模で分散して行うことで有益な情報が得られたことから、現実的な「共同体制」のあり方も考える機会にもなった。

(付記)

今年度、知内高校での協議にご参加頂いた先生方、また各関係機関での懇談にご協力頂いた方々から、貴重な情報をご提供いただきました。この場をお借りして深くお礼申し上げます。



知内ダム、重内神社を訪問する知内高校の生徒たち